

大原社会問題研究所所蔵『水平新聞』について：修復・保存・公開

Nakamura, Mika / 中村, 美香

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

711

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

2018-01-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014761>

大原社会問題研究所所蔵 『水平新聞』について——修復・保存・公開

中村 美香

はじめに

- 1 全国水平社と『水平新聞』
- 2 『水平新聞』の修復について
- 3 『水平新聞』の保存・公開と水平運動関係資料

おわりに

法政大学 大原社会問題研究所所蔵資料 修復保存報告

はじめに

法政大学大原社会問題研究所（以下、大原社研）は、2016年12月から2017年3月にかけて、所蔵資料のひとつである全国水平社の機関紙『水平新聞』の修復を行った。本稿は、歴史資料としての『水平新聞』の特徴とその修復作業について紹介し、大原社研所蔵資料を広く利用していただくための情報を提供するものである。

1 全国水平社と『水平新聞』

『水平新聞』は1924年6月20日から1937年8月1日まで、4次13年にわたって全国水平社の機関紙として発行された新聞である。『水平新聞』の発行を4次に分けて考えるのは、廃刊・再刊を繰り返して発行された新聞だからであり、1972年に出版された2つの復刻版『全国水平社創立50周年記念出版 復刻版 水平新聞』（「水平新聞」刊行会）および『近代文芸資料復刻叢書 第七集 部落問題資料文献叢書 第四巻 水平新聞 復刻版』（株式会社世界文庫）でも4次に分けて掲載されている。発行所は、第1次が全国水平社聯盟本部（京都市上京区鷹野北町8）、第2次以降は水平新聞社（神戸市旭通2丁目35、大阪府泉南郡南王寺村160、大阪府泉南郡南王子1258）である。

発行号数は全73号である。ただし、全73号分のうち10号分が不明で未発見状態であり、特に第4次の16号・18号はほぼ確実に発刊されていないことが明らかであるとされ、また、第2次の11号・12号・14号も未発刊ではないかと推測されている〔村崎1972〕。なお、後述するが、第3次の15号もこれまで未確認とされており前掲2冊の復刻版でも掲載されていないが、大原社研ではその15号を所蔵している（次頁表1）。

現在、『水平新聞』を利用するには前掲2冊の復刻版しかなく、『水平新聞』に関する研究論文もほとんどない。ただし、『同和通信』など水平運動周辺の資料において、水平社や水平運動に関する論考が発表されている⁽¹⁾。

表1 水平新聞の発行と大原社研所蔵一覧

	水平新聞発刊	発刊号数	大原社研所蔵号数	水平社大会開催
1922 (大正11年)				第1回
1923 (大正12年)				第2回
1924 (大正13年)	第1次	1～5	1～3	第3回
1925 (大正14年)	第2次	1～26	1, 2, 16～18, 20～26	第4回
1926 (大正15年)				第5回
1927 (昭和2年)				第6回
1928 (昭和3年)				第7回
1929 (昭和4年)				第8回
1930 (昭和5年)	第3次	1～16	1～16	第9回
1931 (昭和6年)				第10回
1932 (昭和7年)				
1933 (昭和8年)				第11回
1934 (昭和9年)	第4次	1～26	1, 2, 4～14	第12回
1935 (昭和10年)				第13回
1936 (昭和11年)				
1937 (昭和12年)				第14回
1938 (昭和13年)				第15回
1939 (昭和14年)				
1940 (昭和15年)				第16回

全国水平社（以下、水平社とする）は、1922年（大正11年）3月3日に被差別部落民の解放を目指して創立された団体である。しかし『水平新聞』の発行開始は1924年6月であり、水平社創立から2年あまりが経過している。水平社が創立される以前から各地で部落解放や水平運動の気運が高まっていた。水平社の創立から『水平新聞』の発刊・終刊に至る歴史は、水平運動の波乱の歴史と考えられる。

水平社の創立について、いつから論じるかは、意見の分かれるところである。一般に、1871年の解放令から始まり、1917年ロシア革命成功の影響、1918年米騒動への被差別部落民の参加⁽²⁾などにより、各地で部落解放を目指す動きがあらわれ、水平社創立に結び付く団体⁽³⁾が各地でつくられたとされる。そして、1921年（大正10年）に奈良県柏原に「部落民自身の力による部落解放運動」〔阪本1969：1〕を目指して水平社創立事務所が設置され、1922年（大正11年）3月の水平社

(1) 第2次『水平新聞』発行人をつとめた木村京太郎の復刻版の解説〔木村1972〕は、自らの経験に基づいた証言記録として参考になる。

(2) 1918年7月22日～9月17日、42都道府県約500か所で発生した米騒動では、22府県で被差別部落民が参加したとされ、送検者8,000人のうち10%以上の887人が被差別部落民であったという〔部落解放研究所1981：132〕。

(3) 代表的な団体として1920年に結成された燕会がある。代表メンバーは西光萬吉、阪本清一郎、駒井喜作などで、彼らの活動がやがて水平社の創立につながった。

創立大会によって正式に全国水平社が京都で創立された。

その水平社創立大会では、採決された3つの決議の1つに「全国水平社本部に於いて我等団結と統一を図るため月刊雑誌『水平』を發刊す」とうたわれた。これが、水平新聞の発行につながった。まず、同年7月に雑誌『水平』第1号が、また同年11月に第2号が発行された(図1)。その内容は水平社の創立と、その後の活動報告と活動への反響が盛り込まれたものであった。同誌は月刊を目指したが、水平運動の活動に忙殺され、編集に専念できなかつたことと、誌代が回収されず資金が続かなかつたため、2号で終了となつた⁽⁴⁾。

図1 雑誌『水平』第1号および第2号



(大原社研所蔵〔下坂文庫〕)

その後、雑誌は金がかかるため、新聞として毎月確実に刊行することになり[木村1972]、1924年(大正13年)6月に『水平新聞』第1号が創刊された。そこには一部、雑誌『水平』に続けて載せる予定だった原稿⁽⁵⁾も掲載された。このことから、新聞『水平新聞』は内容的にも雑誌『水平』の後継誌といえるだろう。しかし『水平新聞』も1924年7月に水平社のメンバーの2人が徳川家達の暗殺を企てたとして検挙され、5号で休刊となった(第1次『水平新聞』)。

第2次『水平新聞』は、翌1925年9月に復刊して、その後4年にわたって発行された新聞を指す。ただ、その財政状況は厳しく、また、1928年の三・一五事件で編集責任者であった木村京太郎が検挙投獄されたことにより、5か月休刊している。休刊後に刊行された24号も発売禁止となり、苦境に立たされた新聞は、1929年3月、刊行26号で休刊となった。

(4) 木村京太郎が執筆した復刻版の解説に「月刊をめざした全水本部の機関誌「水平」は、それ以後続刊されなかつた」とある[木村1972:4]。

(5) 高橋貞樹「古代奴隸史考」と輪池越智(楠川由久)「五寸釘の寅吉」が掲載された。

図2 『水平シンブン』3次12号



図3 『水平新聞』3次15号



(大原社研所蔵)

ただし、その年の12月には早くも発行が再開された(第3次『水平新聞』)。再刊第1号では「水平新聞が従来ムツカシイから誰も読む人がないと言われていたが今後はその点を十分に注意してよく読まれる新聞を作るべく務める」と述べられ、各地の大会や活動報告とともに文芸作品も掲載された。このように苦勞して発行された新聞であるが、11号と12号は「安寧秩序を害す」とされ発禁となっている[木村1972:11]。

発禁となった12号(1931年9月20日発行)は、資金不足のため、ガリ版刷り2頁(24cm×32.7cm)で、タイトルの表記は『水平新聞』ではなく『水平シンブン』となっている。手書きで書かれ、1面の真ん中に「総本部維持費を送れ! 切手も買へぬ総本部が他にあるか」と大きく書かれている。経済的に逼迫している状況が紙面から見てとれる(図2)。

15号については50部しか発行されておらず、前掲2冊の復刻版では、15号は未確認とされ、収蔵されていない。しかし大原社研はその15号を所蔵しており、状態も良く残っていることは特筆すべきことであろう(図3)。大原社研が所蔵している「幻の」15号は、12号と同様、ガリ版刷り、手書き、2頁で、1面の始めに、囲みで「第15号発行について」と題して以下のように書かれている。

全国水平社機関紙『水平新聞』は、毎月1回発行の予定であり乍ら、絶えず経済的な行詰りから、三ヶ月に辛うじて一回の割合でしか発行されてゐない。

水平新聞は、七夕さまのようだとさへ云はれてゐる実状である。第十四号は二月二十七日附で全国の同志の手許へ送られたが、今度の第十五号は、極めて少部数のために、ごく、小範囲

にしか配布できない。(以下、略)

この頃、水平社では、官憲の弾圧による『水平新聞』発売禁止の他に、絶えず資金不足に悩まされていた。そのうえ、1931年頃から組織の解消を求める動きがあり⁽⁶⁾、第10回全国水平社大会では「全国水平社解消の提議」が出されるに至る。この水平社解消闘争は1933年3月まで続き、水平社の活動力は弱まり、『水平新聞』はついに1932年の16号でまたもや休刊する。その年には全国水平社大会も開催されていない。

その後、1933年6月の高松地方裁判所差別判決事件⁽⁷⁾で全国水平社はその勢いを吹き返し、再び1934年11月に『水平新聞』が復刊された(第4次『水平新聞』)。しかし日中戦争の拡大によるファシズムの強まりと弾圧によって水平運動からの脱落者は増え、『水平新聞』は1937年8月1日の26号をもって廃刊となる。同年9月、全国水平社は拡大中央委員会をひらき、戦争協力を表明する運動方針を発表し、その活動に幕をおろした。その後1941年12月に太平洋戦争が始まると、政府は言論出版集会結社等臨時取締法を施行して「思想結社とされた水平社に対しては存続不可の方針を立て、水平社に自発的解消をするように強制し」[部落解放研究所1989:344]、全国水平社は消滅に至った。

ところで、『水平新聞』の紙面には、欄外にまで文字が書かれているものが多い(次頁図4)。同時代に発刊された無産政党関係の新聞(『社会民衆新聞』など)にもその傾向は見られるが(次頁図5)、『水平新聞』は強く意図して紙面のすみずみまで文字で埋め尽している。

このことについては、発行人をつとめた木村京太郎は、「編集の技術など気にしないで、紙面を最高に活用して水平運動を拡進し、欄外には常に、これを利用して記事とスローガンでうづめ尽した」[木村1972:14]と記述している。スローガンだけでなく、本文中に納まりきらなかった記事本文も欄外に記載されており、その他、広告も掲載されている。

次節で『水平新聞』の修復について述べるが、「欄外にまで文字が書かれているのは珍しい」と修復士から指摘を受けた。これは『水平新聞』の大きな特徴である。前出の木村氏はそれを「各行間ににじむ血の記録」と表現している。それは資金難に苦しみ、ページ数を少なくするための苦肉の策だったかもしれない。それだけでなく、紙面の真ん中に大きくスローガンを入れることにより、視覚に訴え、読者の心に訴えるねらいもあったと思われる。

2 『水平新聞』の修復について

大原社研が今回『水平新聞』を修復するきっかけとなったのは、2016年4月に水平社博物館(奈良県御所市)から『水平新聞』を展示に使用したいが貸出可能かどうかとの問い合わせがあったこ

(6) 「水平社左派グループは、(中略)部落民を一つの身分組織に包含して運動を進めている水平社の組織そのものに、運動の沈滞の原因を求めた。(中略)日本労働組合全国協議会と全農全会派への彼らの再組織と水平社の即時解消を打ち出した」[部落解放研究所1989:258]。

(7) 高松の被差別部落民の結婚で、身分出自を隠していたこと、相手の女性が18歳だったことで、被差別部落民が誘拐罪に処せられた事件。これに憤った被差別部落民が司法当局と交渉し、被告の釈放、裁判長・警察署長の辞任、検事の左遷につながった。

図4 『水平新聞』1次3号(1924年8月20日)(左)と2次16号(1927年6月25日)(右)



(大原社研所蔵)

図5 『社会民衆新聞』1927年7月19日号



(大原社研所蔵)

とである。ホームページで公開している大原社研のデータベースには原本の所蔵の有無についての記述はなく、通常の本架を確認すると複製物であったため、閲覧停止の本架で原本があるかどうか探したところ、『水平新聞』の原本が見つかった。しかし、それは奈良への移動に耐えられないばかりでなく、ページをめくるたびに裂けてしまうほどの状態であった⁽⁸⁾。現物資料の貸出要請には応えられないと判断し、水平社博物館にはかつて提供した画像データを使用してもらった。この残念な経験が『水平新聞』の現物資料を修復する今回のプロジェクトにつながった。

大原社研の会議で修復を正式に決定するに先立って、専門業者に修復費用の見積もりを依頼した。また『水平新聞』を所蔵している

(8) 近年では、閲覧要請が多く原本の傷みが激しい資料については、少しずつデジタルデータを作成し、閲覧時にはデータを印刷したものを利用し、原本は中性紙に包んで閲覧停止の本架に保管する作業を進めている。かつても原本を保存するためにマイクロフィルムで撮影し、紙出力したものを閲覧や複製に使用していたが、マイクロフィルムから紙出力した後の原本の保存対策は十分ではなかった。

可能性のある全国の機関に対して、原本の有無について調査を行った⁽⁹⁾。その結果、『水平新聞』の原本を所蔵している機関は少なく、また大原社研のように揃って所蔵しているところは稀少であることが分かり、修復決定の判断につながった⁽¹⁰⁾ (表2)。

表2 『水平新聞』原本を所蔵している機関

	第1次 (1924)	第2次 (1925-1929)	第3次 (1929-1932)	第4次 (1934-1937)
東京大学大学院法学政治学研究科 附属近代日本法制史料センター 明治新聞文庫	3			
同志社大学人文科学研究所	1, 2, 3, 5	1, 2, 5, 8-10, 13	1, 4-6, 13	
京都大学経済学部上野文庫	1, 3, 5			
水平社博物館		17, 21, 23		4, 5, 7, 9, 10, 12, 13, 15, 23
大阪人権博物館 (リパティおおさか)		23		14
法政大学大原社会問題研究所*	1, 2, 3	1, 2, 16-18, 20-26	1-16	1, 2, 4-14

(大原社研調べ、2016年8月現在)

*蔵書目録カードには、1次の1号～3号と2次の2号、3号に「下坂」とメモ書きされており、これら5号分については故・下坂正英氏より大原社研に寄贈されたものと推測される。戦前戦後を通じ農民運動・無産運動で活躍した下坂氏が収集・所蔵し、大原社研に寄贈された戦前の雑誌や新聞類は、大原社研の所蔵誌の欠号を補充する役割を果たすものが多い。

具体的な修復内容および修復作業の過程については、文末の修復業者による報告書「法政大学大原社会問題研究所所蔵資料 修復保存報告」を参照していただきたい。

修復前の『水平新聞』は、製本されていたものの、新聞原紙が酸性劣化のため茶変色して弱り、紙面の亀裂箇所はセロファンテープで留められ、また、そのテープが変色してはがれている無残な状態であった。修復作業では、まず新聞を1枚ごとに解体する作業から始め、再び製本状態に戻すのではなく、新聞本来の1号ずつの状態に戻してもらうよう業者に依頼した。ページによっては裂けてしまったり、または穴があいてしまったり、文字部分が剥奪して部分的に文字が読み取れないものも多くあった。また、紙の状態が悪く、保存状態も良くないため、新聞を持ち上げただけで粉々に崩れてしまう状態のものもあった。そのようなものに対しては、紙面の全面に文字を損なわない薄い和紙で裏打ちする修復を行うことにした。今回は展示に使用することも考えて、どの面も文字が読めるような形で依頼を行った。場合によっては、文字が見えにくくなるまで厚い和紙でしっかりと裏打ちする修復方法もあるが、今回は新聞という文字情報の重要性に鑑み、その方法は選択しなかった。

次頁表3は、修復業者が作成した修復対象資料の記録を元にした一覧である。資料の酸性劣化状況については、Sの記号でランク付けされている。SSSのものとSSの一部は全面裏打ちで処理を行った。

(9) 各機関についてはHPなどで原本の所蔵が明らかな場合はHPから情報を入手した。HPでは不明な場合は、直接、電話やFAXで問い合わせを行った。

(10) 村崎信夫が執筆した「水平新聞」刊行会の復刻版の解説には、『水平新聞』の「全巻の復刻は荊冠友の会、世界文庫、大原社研、部落解放同盟、部落解放同盟正常化全国連絡会議によって計画されているにもかかわらず今日にいたるも実現されていない実状である」と記されている [村崎 1972: 2]。

表3 修復対象資料一覧

水平新聞 発刊		号数	面頁	概寸	T判	折丁	文字 あり	形態	スタンプイン ク・テープ	劣化損 傷診断	酸性劣化 パリのり度	全面裏 打補強	
第1次 水平新聞	大正13年 6月20日	1号	4面	47.5× 32	T判大	折り丁	●	綴じ	赤 テープ	中	S	しない	
	大正13年 7月20日	2号	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ 外れ	紫	中	S-	しない	
	大正13年 8月20日	3号	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ	赤	軽	S-	しない	
第2次 水平新聞	大正14年 9月20日	1号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ		軽	SS	しない	
	大正14年 10月20日	2号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ 外れ	赤 テープ	中		しない	
	昭和2年 6月25日	16号	4面	39× 28	T判	折り丁	●	綴じ	赤茶 テープ	甚大	SSS	全裏	
	昭和2年 8月1日	17号 -1	4面	45.5× 31	T判大	折り丁	●	挿入	赤茶	甚大	SSS	全裏	
	〃	〃 -2	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ	赤茶, 青 テープ	甚大	SS	全裏	
	昭和2年 10月15日	18号	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ	赤茶, 青 テープ	甚大	SSS	全裏	
	昭和3年 1月1日	20号	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ 外れ	薄い赤 テープ	甚大	SSS	全裏	
	昭和3年 3月1日	21号	4面	〃	T判大	折り丁	●	綴じ 外れ	濃い赤	甚大	SSS	全裏	
	昭和3年 8月10日	22号 -1	4面	39× 26	T判	折り丁	-	綴じ 外れ	赤	中	SS	しない	
	〃	〃 -2	4面	〃	T判	折り丁	-	挿入	赤, 黒	中	SS	しない	
	昭和3年 11月1日	23号 -1	4面	〃	T判	折り丁	-	挿入	テープ	中	SS	しない	
	〃	〃 -2	4面	〃	T判	折り丁	-	挿入	赤, 黒 テープ	甚大	SS	しない	
	昭和4年 1月1日	24号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ 外れ	赤 テープ	甚大	SS	全裏	
	昭和4年 2月1日	25号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤	中	SS	しない	
	水平リー フレット 昭和4年3 月3日		4面	25× 19	小 サイズ	折り丁	-	綴じ	赤, 黒イ ンク テープ	甚大			しない
	昭和4年 3月10日	26号 -1	4面	39× 26	T判	折り丁	-	挿入	赤, 青	中	SS	しない	
〃	〃 -2	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤 テープ	中	SS	しない		
第3次 水平新聞	昭和4年 12月1日	1号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤, 青	中	SS	しない	
	昭和5年 1月1日	2号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤, 青	中	SS	しない	
	昭和5年 2月5日	3号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤, 青	中	S	しない	

第3次 水平新聞	昭和5年 3月27日	4号 -1	2面	〃	T判半	一枚物		挿入	赤, 青	中	S	しない
	〃	〃 -2	2面	〃	T判半	一枚物		綴じ	黒 テープ	甚大	S	しない
	昭和5年 5月31日	5号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤	中	S	しない
	昭和5年 8月5日	6号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	SS	しない
	昭和5年 9月30日	7号	2面	〃	T判半 分	一枚物		綴じ 外れ	赤	中	S	しない
	昭和5年 11月25日	8号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ 外れ	赤	甚大	SS	しない
	昭和6年 1月26日	9号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤 テープ	甚大	SS	しない
	昭和6年 3月3日	10号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	SS	しない
	昭和6年 6月28日	11号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	甚大	SS	しない
	水平シン ブン 1931年9 月20日	12号	2頁	34× 24	小 サイズ	一枚物		綴じ	青	軽	B	しない
	昭和6年 11月25日	13号	4面	39× 26	T判	折り丁	-	綴じ		中	S	しない
	昭和7年 2月27日	14号 -1	2面	55× 39.5	T判	一枚物		綴じ		甚大	S	しない
	〃	〃 -2	2面	〃	T判	一枚物		挿入	濃い赤 テープ	甚大	SSS	全裏
	〃	〃 -3	2面	〃	T判	一枚物		挿入	赤	中		しない
	昭和7年 6月4日	15号	2頁	33.5× 24	小サイ ズ	一枚物		挿入	赤	軽	B	しない
昭和7年 7月3日	16号 -1	4面	40× 28	T判	折り丁	●	挿入	赤	中	S	しない	
〃	〃 -2	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ		中	S	しない	
第4次 水平新聞	昭和9年 11月15日	1号 -1	4面	〃	T判	折り丁	●	挿入	赤	中	S-	しない
	〃	〃 -2	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	甚大	S+	しない
	昭和9年 12月5日	2号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	甚大	S	しない
	昭和10年 2月5日	4号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	S	しない
	昭和10年 3月5日	5号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	SS	しない
	昭和10年 4月5日	6号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	甚大		しない
	昭和10年 5月5日	7号 -1	2面	〃	T判半 分	一枚物	-	挿入	赤	中	S-	しない
	〃	〃 -2	2面	〃	T判半 分	一枚物	-	挿入	赤	中	S-	しない

第4次 水平新聞	〃	〃 - 3	2面	〃	T判半 分	一枚物	-	綴じ 外れ		中		しない
	昭和10年 6月5日	8号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	S	しない
	昭和10年 7月5日	9号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中		しない
	昭和10年 8月5日	10号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	SS	しない
	昭和10年 9月5日	11号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤	中	SS	しない
	昭和10年 10月5日	12号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤	中	S-	しない
	昭和10年 11月5日	13号	4面	〃	T判	折り丁	-	綴じ	赤	中	S-	しない
	水平新聞 付録 昭和10年 11月5日		2面	〃	T判半 分	一枚物	-	挿入		中	S	しない
	昭和10年 12月5日	14号	4面	〃	T判	折り丁	●	綴じ	赤	中	S-	しない

(大原社会問題研究所所蔵『水平新聞』一覧)

3 『水平新聞』の保存・公開と水平運動関係資料

今回、資料修復にあわせて、脱酸性化処理も行った。このことにより、今後、資料の酸化の進行も抑制されると期待したい。また、取り扱い時の破損しやすさも防げるようになった。

また、次頁図6のように『水平新聞』の各号ごとに厚い中性紙で作った2つ折りのフォルダとタトウ式のフォルダに収めて(左)、全体を紙面サイズに合わせて作った中性紙の保存箱に入れた(右)。このように保存することで新聞が曲がったり、端が崩れたりすることなくしっかりと保管できるようになった。また、各号を探すときもフォルダごとに持ち上げ、中を確認するときもフォルダを開けば資料が目に入るようになっていて、直接本紙にさわることなく取り扱うことができ便利である。

これらの仕様は修復業者と細かくやり取りをしてひとつひとつ方法を決めていった。業者から提案してもらった場合もあるが、こちらから希望を伝え、それを受けて工夫してもらった点も多々あった。

今後は、利用要請があれば、展示にも貸出すことを検討したい。大原社研では、展示のための輸送には、美術品輸送の専門業者による輸送を条件としている。資料自体がしっかりと修復されていれば、さらに多くの人の目に触れる機会も増えるのではないだろうか。

資料の保存については、現在、地下書庫にある閲覧停止の書架の資料をすべて中性紙の新聞専用箱に入れる作業を順次行っている(次頁図7)。『水平新聞』だけでなく、他の貴重な資料が埃にさらされ、カビが発生しやすい状態にあったが、保存箱に入れることにより、埃を防ぎ、湿気がたまることを抑制して、貴重な資料を長く保管することを期待している。また温度と湿度のチェックも

図6 修復後の『水平新聞』



(大原社研所蔵)

図7 閲覧停止の書架、中性紙の箱に入った新聞棚



(大原社研の地下書庫)

行い、湿度の高くなる春先から秋にかけては除湿機を置き、24時間フル稼働させている。また、サーキュレーターも設置して、空気がたえず循環するように保存対策を行っている。

おわりに

『水平新聞』の4度にわたる休刊、復刊の歴史は、資金難と弾圧との闘いの歴史であった。休刊しても必ず再刊への動きが起こり、あらためて刊行方針を掲げ、今度こそはより良い機関紙をより多くの人に届けたいという思いで、試行錯誤しながら作成されたのであろう。『水平新聞』は全国水平社の活動を映す鏡のような役割をしていたといえる。その勢いが衰えると休刊になり、勢いを取り戻すと復刊され、そして全国水平社の活動の終了に先がけて廃刊となり、その終わりを告げた。

大原社研は『水平新聞』のほかにも貴重な資料を多く所蔵している。一気に手当を行うことはできないが、限られた予算のなかで、その必要性を確認しながら、多くの利用者に所蔵資料を閲覧利用していただけるよう、図書館・資料館としての役割を果たしていきたい。

（なかむら・みか 法政大学大原社会問題研究所嘱託職員）

【参考文献】

秋定嘉和・朝治武『近代日本と水平社』解放出版社，2002年。

朝治武『水平社の原像——部落・差別・解放・運動・組織・人間』解放出版社，2001年。

朝治武『アジア・太平洋戦争と全国水平社』解放出版社，2008年。

朝治武・守安敏司『水平社宣言の熱と光』解放出版社，2012年。

大阪人権歴史資料館編『全国水平社創立七十周年記念 全国水平社 人の世に熱あれ！人間に光あれ！』大阪人権歴史資料館，1992年。

「(仮称)水平社歴史館」建設推進委員会編『図説 水平社運動』解放出版社，1996年。

木村京太郎「(解説)水平新聞の編集発行とその経緯について」『部落問題資料文献叢書 第四巻 水平新聞 復刻版』世界文庫，1972年。

阪本清一郎「解説」『部落問題資料文献叢書 第三巻第1冊 水平』世界文庫，1969年。

奈良県水平運動史研究会編『奈良県水平運動史』部落問題研究所出版部，1972年。

部落解放研究所編『部落問題——資料と解説』解放出版社，1981年。

部落解放研究所編『部落解放史——熱と光を 中巻』解放出版社，1989年。

村崎信夫「水平新聞復刻版 解説」『全国水平社創立50周年記念出版 復刻版 水平新聞』「水平新聞」刊行会，1972年。

【復刻版】『全国水平社創立50周年記念出版 復刻版 水平新聞』「水平新聞」刊行会，1972年。

【復刻版】『部落問題資料文献叢書 第三巻第1冊 水平』世界文庫，1969年。

【復刻版】『部落問題資料文献叢書 第四巻 水平新聞 復刻版』世界文庫，1972年。

法政大学 大原社会問題研究所所蔵資料 修復保存報告

2017年3月



修復前



修復前

1. 対象資料

資料名：水平新聞、水平新聞奈良縣附録、差別裁判糾弾ニュース、全国水平新聞、他
年代：大正13年～昭和10年(1924～1935年)
形態：新聞やチラシなどが綴じられた上製本
サイズ：主にタブロイド判(40cm x 28cm)
点数：1点(新聞他75枚)

2. 劣化損傷所見

本資料は大正13年から昭和10年に発行された水平新聞他が製本されたもので、大原社会問題研究所にとって非常に貴重な所蔵資料とのことである。形態は黒いクロスのハードカバーの角背の上製本で、背表紙に「水平新聞 自一九二四年六月 至一九三五年十二月」とタイトルが入っている。製本は破損して綴じのノドと背の部分が切れてむき出しになり、新聞の多くが分離してたくさんの破片が落ちている。綴じ方は脚差し紙を貼ってある新聞、直接綴じている新聞、横向きに綴じている新聞の他、重複号の挿入もあり、様々である。

新聞は主にタブロイド判サイズ(およそ40x28cm)の二つ折で4面構成である。折り丁の外側や内側にも印刷されている新聞が多い。製本された時期は不明であるが付属の目次によると7つに分類されており、全部で58号(重複も含むと73号)あり、1面の右上に紫の郵便スタンプや研究所の赤い所蔵印、寄贈の青いスタンプなどが押されている。半分サイズのリーフレットや一枚物のチラシもみられる。また、白い上質紙のインク書きしたメモが貼られている新聞もある。サイズ違いの新聞を脚差し紙を使ってずらして綴じ込んでいるようである。

年代的にも新聞は質の悪いパルプが素材の酸性紙であるため、脆弱化して周囲に細かく亀裂が生じている。ほとんどの新聞は酸性劣化が著しく茶色く変色し、全体的に弱ってパリパリしている。約4割が劣化が甚大と思われ、注意して扱わないとちよっとのきっかけですぐに小さな亀裂が生じる状態である。真中と後半に綴じられている昭和2年～3年の新聞が劣化が著しい。

前半に綴じられていた大正13年の水平新聞1～3、5号と奈良縣付録水平新聞の4、5号は長さが7cm幅が4cmくらい大きくて紙も白っぽく、他の新聞に比べて、変色が少ないが、カバーからはみ出している部分は汚損し、折れや亀裂が生じている。

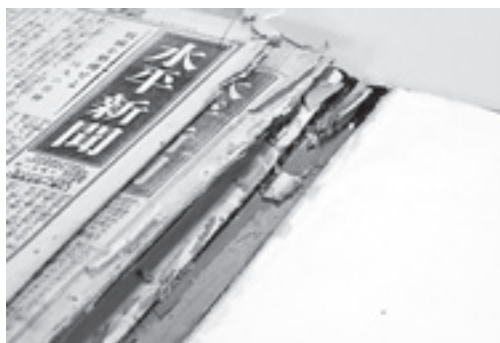
ページに生じた大きな亀裂が目立つ上に、それを半透明の紙テープやセロファンテープを貼って補修してあるのが多数みられる。紙テープは固くなっているが変色はしていないが、セロファンテープは真っ茶色に変色して文字を損ねている。クリップ錆びも数か所あり、鉄錆びで紙が腐食されている。

3. 作業内容

修復前撮影、劣化損傷調査作成、ドライクリーニング、解体・分離、補修テープ除去、フラットニング、繕い、破片戻し、裏打ち補強(一部)、脱酸性化処理、容器収納(リハウジング)



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前



修復前

4. 主な作業内容

①修復前撮影・劣化損傷調書作成

デジタルカメラで資料の現状の写真撮影を行った。撮影後に現在の資料の状態および劣化損傷の状態を記録するため、劣化損傷記録調書を作成した。

新聞名、年月日、号数、枚数、大きさを順番に記録した。目次の分類にしたがい、①-1, ①-2, ①-3 という風に連番の短冊を付与した。製本の中にたまっていた破片を回収し、特に文字のある破片は壊さないようにまとめて（後で元の位置を調査して貼り戻せるように）保管した。



記録調書作成

②解体・分離

製本のノド部分を解体し、完全に分離していない新聞をハードカバーの背から分離した。

脚差し紙があるものは脚差し紙を切って、完全に分離してから、新聞の折り部分に貼られた脚差し紙をアイロンで温めながら慎重に剥した。新聞が直接貼り付けられているものは、折り丁がかなり破損していたため、より慎重に剥した。新聞同士をくっつけている固まった接着剤（膠）はマイクロスパチュラで削って除去し、1号、1号に分離した。



解体・分離中

③補修テープ除去

セロファンテープは有機溶剤を用いて除去した。半透明の紙テープは種類が違うものがあり、水や有機溶剤で除去した。接着剤の含浸が強かったため、無理に剥すと文字も剥けてしまう心配があったので、一部の紙テープはそのままとした。

赤や紫、青のスタンプに対しては、水や溶剤への耐性をチェックするスポットテストを行い、滲みが生じないように配慮した。



紙のテープ除去



除去前



除去後

④ドライクリーニング

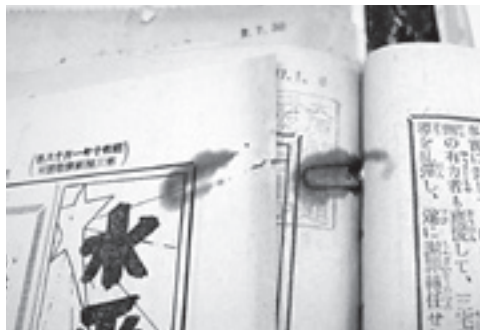
資料は刷毛でドライクリーニングをした。新聞の表面に大量に埃が付着して汚損して暗色化しているものは、パウダーイレイザー（粉消しゴム）でクリーニングを施した。



クリーニング途中（右半分がクリーニング済み）

⑤錆び除去

クリップやステープラーの痕と思われる錆が数点に見られた。文字の周囲はそのままにして、文字のない部分の錆びを除去した後、裏面から極薄の和紙を貼り付けた。インク焼けの劣化症状を示していたので、生麩糊の代わりに水を含まない接着剤（クルーセルG）で貼り付けた。



除去前（解体前）



除去後

⑥手繕い、破片戻し、裏面補強

大きな亀裂の他に、新聞の周囲も劣化してパリパリになっていたため、極薄の和紙を貼って補修した。基本的に、補修紙は内側（二・三面側）から貼り付けた。大きな欠損部分には少し厚めの和紙を厚みを合わせた。特に折り丁の部分は非常に弱っていたものには外側と内側から極薄の和紙を貼って開閉に耐えるように補強した。製本カバーより大きな新聞ははみ出して破損していたり、脚足して貼り付けられた新聞やチラシなど様々な破損を和紙で補修した。

数ミリ程度の目立たない亀裂も、めくる際のストレスでピリピリと亀裂が長くなるような症状もみられたため、補修後も何度も繕い箇所をチェックした。部分繕いでは補強しきれないくらい全面的に脆弱化している12点に関しては、所蔵者と協議の上、極薄和紙で全面裏打ちを施した。



繕い前



繕い後

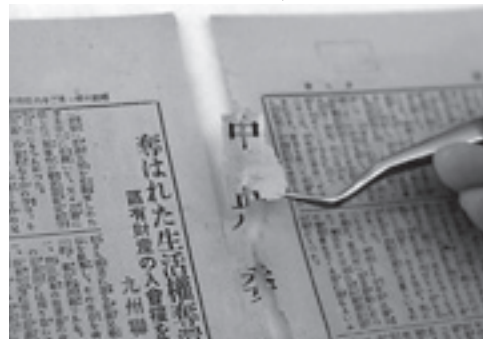
記録、解体時に保全しておいた文字のある破片は、繕いの段階で、元の位置を同定する作業を行った。破片が挟まっていた場所が正しいとは限らないため、繕いが済んで安定化した新聞を1点1点見ながら、元の場所が同定できた破片は貼り戻した。文字破片の多くは元に戻すことができた。位置不明の破片は返却とした。



繕い：保全していた破片



繕い：固着した破片剥し



繕い：破片戻し

⑦脱酸性化処理

解体後に代表的な新聞などの紙の表面の pH 測定を行った。（ガラス平板電極式 pH メータ/ホリバ製使用）

番号	年代・特長	pH 値
①-3	大正 13/8/20-3 号 白い洋紙	4.78
②-5	大正 14/4/5-9 号 茶変色	3.37
③-1	大正 14/9/20-1 号 茶変色	3.79
⑤-12	昭和 10/8/5-10 号 茶変色	3.23
⑥-4	昭和 8/10/31-6 号 茶変色	4.00
⑦-1	昭和 2/7/25-1 号 茶変色	3.62

結果、大正 13 年の白い上質紙系の洋紙が 4.78 だった以外はすべて 4.0 以下で非常に酸性度が高いことが確認された。

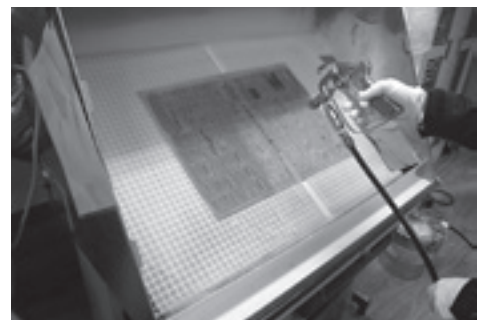
紙の中の酸を中和し、将来的な酸性劣化を抑制することを目的として脱酸性化処理を施した。ブックキーパー法のスプレー方式で1枚ずつ処理を行った。

<ブックキーパー法>

アメリカに本社をおくブリザベーション・テクノロジー社による酸化マグネシウムの微粒子により紙中の酸を中和する方法である。非水性処理で紙中に存在する酸を中和するとともに少量のアルカリ物質が紙中に残留し、バッファーとなり将来の酸性化を防ぐ。酸化マグネシウム微粒子および分散剤は紙やインクの変色・変質を生じさせず、資料にも人体にも安全なもので、米国議会図書館やオランダ王立図書館など欧米の多くの資料保存機関で採用されている。



pH 測定



脱酸性化処理

⑧容器収納(リハウジング)

脱酸性化処理後の新聞は、1号ずつ中性紙製の二つ折りフォルダに挟み、将来的な展示等に際して扱いやすくした。さらに、目次の分類毎に7つに分けて、タトウ式の中性紙ボード製のフォルダに収納した。解体した元のハードカバーは同じく、中性紙ボード製のフォルダに収納した。

中性紙段ボール製の特注サイズのかぶせ箱を製作し、全てを1つにまとめて収納した。

【使用素材】

- ・中性紙製二つ折りフォルダ…AF プロテクト
- ・タトウ式の中性紙ボード製フォルダ…ボックスボード
- ・中性紙段ボール製かぶせ箱…プレミアムコルゲートボード



二つ折フォルダ



タトウ式のフォルダに納めたところ



タトウ式のフォルダを並べて

⑨完成撮影、作業報告書作成

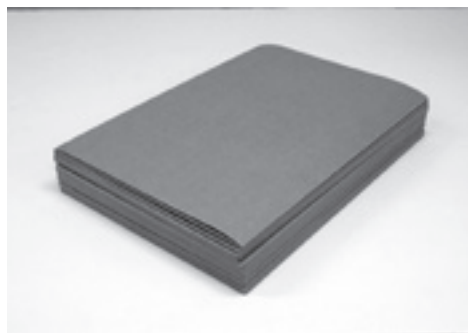
5. 返却物

- ・位置不明の破片
- ・脚差し紙
- ・除去したテープ

6. 修復前後比較画像 (左:修復前 右:修復後)



修復前



修復後



修復前



修復後



修復前



修復後



修復前



修復後

6. 修復前後比較画像 (左:修復前 右:修復後)



修復前



修復後



修復前



修復後



修復前



修復後



修復前



修復後